

梅はみな接木にすべし、實壽の儘にては實小さく、却て成長惡し、園中詠めとする計ならば、梅臺に接てよけれども、多く接んと思はゞ桃臺にすべし、先桃の實をふせ、生出たるを肥して育れば、其年一尺、又一尺三四寸にも五寸にも伸るもの也、夫を翌春間五寸位置、締を育る如く肥しを多く施し作なば、三尺位生立べし、夫を臺木にして接て宜し、攝州邊の梅は殘らず桃臺也。先接旬は、花の盛りより過る頃迄に接べし、花みな落ては少し青葉出る頃まではつぐべし、それよりおくれてはつき方惡し。

接やうは此奥に蜜柑の接方を委しく記せば、是に見合接給ふべし、
接て後、臺木の桃より茅を生する事夥し、油斷なく二三日間置てはかきくすべし、其冬は霜覆ひして翌春本植すべし、

〔醍醐隨筆下末〕一接木は本の臺木より養ふに、臺木の善惡によらず、末の接穗によるはいかにぞや、桃の臺木に梅を接ねれば梅也、あやまりても桃とならぬ、いかなる道理ぞと不破翁いぶかる、されば臺木は土地とおなじ、接穗はたね也、土地は泥土にても砂土にても、梅のたねをう、れば、梅生じ、桃のたねをう、れば桃生る、土地はたねを養ふのみ也、臺木も接穗をやしなふのみなり、
〔明月記〕寛喜二年三月七日己亥、早旦重以宗弘問有長朝臣○註兩株八重櫻、一條殿枝續木○花漸開、
永日徒然令分栽菊苗草不憚土用

〔駿臺雜話一〕老僧が接木

されば是につけて思ひ出し事あり、忍が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とてひとつ眞言寺あり、翁鳩巣いとけなかりしころ、其住僧を乞りて、乞ばく寺に行つ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて、前住の時の事をなん語りしをき、侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家家○光徳川 谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにてこゝやかしこ御過が